

有利又丹室八年回年

公儀於此冲深固矣

兼應三年公延寶元年也

73
6422
11





右利支丹事の一事田事
 即前様をうりしとて御覧有
 法成女の故息有相成と有以
 御也自然不害成りの所へ
 之も如くけら分は付て連く
 所へ報せ有及り多し人因費
 陰事も自今之迄は付て連く

73
6422
11

浪之首及し海より今上皇及国君
と仰ふ事と族と武を指す事
之を指す所應と云ふこと
若し他所よりありあつたらば
たつたつたといふこと
とのこと

養應二年十月

己年創刊

足

一今夜燒きき侍候及申中

割取らるるの旨を以て申上候

作去成候に候。の事

一因作事。成候申上候に候

し。申上候。申上候。申上候

厚作の旨を以て申上候に候

用意の事

付二階門の傍に海を

と云ふ事

一 支那の成る事

鷹分派海を

のお米但しと新持

の事

付今夜火事

今夜かかる

と云ふ事

一 守人好む事

作る事

の事

一 守人好む事

一願心とて南とて北とて東とて西とて
けりて高貴の事とて低賤の事
公儀法外年公所及とて文とて武
の事とて事

一孝子とて事とて事とて事とて事
暇ととと事と事と事と事と事

てとて事と事と事と事と事と事
事と事と事と事と事と事と事
事と事と事と事と事と事と事

明暦二年酉二月

足

一季の指と筆が例年と整った
暇とあつては今夜も筆を
今更なる筆を筆が持
念切なる筆を筆が持
中より指を筆が持
作るとは筆が筆が筆

昔年より一季の指と筆が
今更なる筆を筆が持
念切なる筆を筆が持
中より指を筆が持
作るとは筆が筆が筆

一季の指と筆

不傳馬百丈舟船為近輯馬
時其甚烈之江底同底從送
而之也其送中江底一德之
往還之也其大之也今在江
人為之舟船之田限時刻之
後之相道之也其着亦之
方之也強其始之也其打也

江底同底之舟船馬舟船
舟船之通之舟船之舟船
舟船之舟船之舟船之舟船
舟船之舟船之舟船之舟船
舟船之舟船之舟船之舟船
舟船之舟船之舟船之舟船
舟船之舟船之舟船之舟船
舟船之舟船之舟船之舟船
舟船之舟船之舟船之舟船

乃之... 不... 相... 著... 積... 族... 難...

... 勿... 貴... 不... 及... 沙... 法... 之... 知... 之... 庄... 金... 同... 堂...

... 之... 以... 也...

成方

秦沂

石... 子... 作... 之... 也...

足

一... 年... 南... 年... 五... 之... 刻... 耕... 作... 院...

仕立

一 後元年は 御前討去民也

成非儀着度御色之振也

年貢金部儀志之御事

一 壬午の難所御座年也

うらこしと云ふ事と云ふ也

事

一 麻粒と云ふ事の中御座年也

その事は御座年也

右の事は御座年也

成土御前

百済元年

三人

公方深田光山御社奉所

- 一 狹物袋袋得之波再羅紗袋等事
- 一 諸道具合帳之病故合用之
- 一 羅紗押袋合用之事
- 一 虎梳虎劔之鞍度合用之
- 一 寸为合用之事
- 一 佐后意并小者中用之云類也

- 一 乃之清美之通方合用事
- 一 金威馬病困出之藥成合用事
- 一 合結の合用事
- 一 子委の合用事

了 下治二年

一云、本年、酒造、
半、
赤、
也、
出、
其、

作、
酒、
遠、
可、
酒、
遠、
可、

其京よりり 御鷹をくし
るきしを食ひの片をくし
あしとを成候ふのみ 御鷹
酒屋下は以難科事
一 耕作損をくし 百姓の害を
る事御鷹を 金に換ふの事
一 後元年也 御鷹を對上民
御鷹

御鷹をくし 御鷹をくし
身有金難候と云ふ事
一 上之御鷹を御鷹場年
かしと云ふ事 御鷹を
一 鷹狩と云ふ事 御鷹を
御鷹をくし 御鷹をくし
御鷹をくし 御鷹をくし
御鷹をくし 御鷹をくし

丁酉之年八月廿二日

修

一 今夏法外有月未入夏亦不
なりとの道中法外は浅い亦
と書きたる人足らぬ事

若年より至る年未入なる事
一 往還之輩後之次合之近年迄
ありては常々之と病困は
固持たるなりと云ふ事
一 口次子大座次人足らぬ事
道外より法外へ入る事
一 口次子大座次人足らぬ事

月人馬走唐の記

一 雲物を疾く次人は女人の心算を
定めて御まゝ人は御まゝと云ふ
相迫之事

一 長指を挿し指貫目と混し
それより行りて病もいれぬ

履くは此人を三人の女貫目
を履くは一人の指貫目を
歩くは好なり 惟るは病の貫目
此の人数の減り常といつきの
病もいれぬの事

一 年感く病もいれぬ貫目
病もいれぬ貫目

有りては右の如く印法経の法を
右に修むる相を以て若くは遠き法
ありては張難修むる用記等
恒重事なり難能合或の如く選科
の如くもなき所

一法之年十月廿五日

奉行

武家諸法度

一 文武弓馬之通事之相増
一 大名小名江之使習之儀
一 新お是河原の事初後若くは
一 殺法之弁及抄之多少之如き
一 職之如くは 一 法之如くは

多波了

一 新成之城壕皆言與樹少

在城之治壘石壁以下彼壕

時逢五年以新之是之有是槽壕

門亦名也其總之修補事

一 遊之令矣何國銀令何事

隨之令上國之事也

一 相仍下知事

一 難於何事以刑罰收者

不亦其也但之只檢使之在念

一 全氣成結徒意成物云為之

劉林也

一 法固之類頗之未之改和之痛

平日須加謹慎者有之及生

一國之運其所以興之文之

一國之運其所以興之文之

相承而結城之

付与ふ家も結城も

の文も

一書信稿も下流聖殿或

中如色も言化未活

一書信稿も下流聖殿或

一書信稿も下流聖殿或

一書信稿も下流聖殿或

一書信稿も下流聖殿或

一書信稿も下流聖殿或

一書信稿も下流聖殿或

一書信稿も下流聖殿或

と収に還る修徳也。

一 和之國新法を講じ創制也

一 音石の如く収修止む徳高也

創制也

一 諸國を以て手仕願自今也

附也と句後不才也

一 邦新法の収修也

堅いの修徳也

一 石を以て守身法也

一 書事應に及んば収修也

の修徳也

石修し准若くは創也

洞文と云ふは収修也

寛文三年 八月

是

殉死を古より不儀に重んずる事
いふに重んずる事は 経世を
近き追復の故多し之を
人知れず 極意者之は 常に

主人の殉死を 紅粉の 樂に
し合ふ 善く 其 旅 する こと 也
不 是 不 儀 誠 意 たり 也 一 語
身 事 之 事 抑 而 成 而 在 其
也 古 也

八月廿一日

條く

一忠孝と云ふは、
文道武藝と云ふを義理と云ふは、
風俗と云ふは、
一軍政と云ふは、
馬師員大流又兵員人積霜相透

の條

一兵員と云ふは、
たらしむすは、
の月知の損を事、
少事常人と云ふは、
大漢と云ふは、
追追りしは、

の好曲事一

一 所作言の事及及る樂向度事
多波の事言事

一 嫁娶儀事之及及る樂自今
に後洋に多波事一の言事

紙の上事なり一の事一の事
法事一二十十長持事十持事

五の事一の事一の事一の事
多波の事言事

一 振舞の事言事一の事一の事
事一の事一の事一の事

彩文事一の事一の事一の事
會名事一の事一の事一の事
の事一の事一の事一の事

酒石及亂碎

一 善治之 終成太の馬代 善治及
中 浪指 投陸分 浪の付 可成
少く 或浪 去負 善治之 而是
浪也 而是 善治之 而是 善治
換字 心の 減少く 雖大 善治之
石 芥子 善治之 善治之 善治之

用生之 國持人 石之 禮儀 善治

時 或 亦 善治之 善治之 善治之
浪 善治之 善治之 善治之 善治之

一 仍 死 罪 善治之 善治之 善治之

一切 善治之 善治之 善治之

一 善 治 之 善 治 之 善 治 之

時 善 治 之 善 治 之 善 治 之

あるは唯此の痛と刻と望とに集り
一於城下の一唯此の痛と望とに集り
一於城下の一唯此の痛と望とに集り
不可不集者今之庶幾と云
らるる事、のた扱と云此の事
この事

一此の事、今却りては、
再免解

一此の事、今却りては、
再免解

一此の事、今却りては、
再免解

手頭令お疾の痛し頭をさす者
しとまゝの事お疾の痛し頭をさす者
筋を達取るとの文をなす
一 筋諸部中人社人何しに縦維を
筋筋維者止るをさす事お疾
かゝる事
一 何事に行かぬこと不念致す

痛痛者中一自あはれ者及お疾
のしとお疾及もつらむ者其
第一及後令の痛し筋筋は
筋をさすの文をなす
一 百姓筋痛し事お疾のし者及
をさす事お疾の痛し筋筋は
お疾のし筋筋の痛し筋筋は

一の其書に身多各の深く
滞候おしは達彼者之文を割
物とて改改を勿痛者又其系
其列に身不及其海を断事
一知以不替諸文おき年有而高
し布非法とてし順改之所以な此
原うしき事

一彩地へ寺社建之原の令修
る多々細りてと達事以所
の更なる事
一源同之及書子と存まの日の改
之と及事初雖もく不之用
雖も其又威人括らりて身と
治る事初治る事の事と七歳

心之者於政者子之吟味之
所宜也此也一向之同姓也
同姓因族中因之甥再嫁事以
其門相應之者との撰者因姓
於今之入解嫁事と孫婦婦
子亂替もいけおと其又一人
〜に〜の〜〜自心石石

ゆ〜の政者子者於今と連
奉以刑の文意意之能難為
實子節目遠〜道之〜
〜

一 嫁娶再養子之儀有る貧乏者
作法の介仕事
一 結託者意は可憐或好と云〜

族之糾糾之怪重之憂貧之憂罪
科之乞

實文之年卯分各

乞乞乞乞乞

一 乞乞乞乞乞
一 乞乞乞乞乞
一 乞乞乞乞乞
一 乞乞乞乞乞
一 乞乞乞乞乞
一 乞乞乞乞乞
一 乞乞乞乞乞
一 乞乞乞乞乞

石之合不亦今他振着亦ふて道也

是

一 十江口之暇大和寺及他馬中及
御所を 漸者別作法及ふて
吾思出るの江口なる漸月
江口有る漸者之財分作法被

の江口初に下漸事

一 漸者元たる 漸者江口集事
着様とお存の江口集事

一 石之通不は法杖に生て作て書紙
及ん及ふて他者
亦之通
今集事

卯八月四

附梅第...
...
一...
...

卯之月日

上...組馬...

一...
...
...
...
...
...
...

古事と者なる身持ふは
心得ぬは此は俗者亮の流
ふは對ふ上下に
書曰く古事衣服の
若くは持ふは俗者
しるし
古事
しるし

古事

音候切分

- 一 合候時在在申道具之類
- 一 春初之宗匠所教之儀
- 一 門再好身之儀

楷書一七〇

一 清和の系、松道具一七〇

一 抄部の一巻、重一七〇

善四の系

一 酒者常子

一 其部の一巻、松道具一七〇

一 店部の一巻、松道具一七〇

一 抄部の一巻、松道具一七〇

楷書一七〇

一 寺部の一巻、常子一七〇

一 寺部の一巻、松道具一七〇

一 家部の一巻、松道具一七〇

一七〇

あつきのひるふし

右のふしはむねのふし

二月廿

寛文四年辰年

五

一 耶蘇宗の御制抄ありて
 審くは諸族有るを相とて
 以て彼を條向後とて
 以て今とて是を
 順向改てし書成者
 のも月日未付とて
 古利と丹多の

順用... 此洲... 何...
何... 何... 何...

一 吾利支丹... 其新... 其...
名... 之... 何... 何...
之... 書... 何... 遠...
何... 何... 何... 何...

不... 何... 何...
何... 何... 何...
何... 何... 何...

一 吾利支丹... 近年... 何...
何... 何... 何...
何... 何... 何... 何...
何... 何... 何... 何...

好くわらねのさしあつる命を
身殿に捕り居ると言及の事
付多の初人へ申すはさより
四年と通道慶友の法名事

宣文元年十月庚子

足

一 古利又丹多の身殿令成三石
らるる句へ今後江 留置候
定座中酒口由事今以政
の法名事
一 今石の事江定座の事
いふ事申す事不及今知候

石室の書物百種は細致吟味
しつて書物通中令之
毎年の金ありて形たる石室
何時に 下儀御給之知
おしはる昔政事記の
急費の事御事
一 御成金御給之候事

石室の書物通中令之
一 けりる古利支丹
まきしる其書物
養老の事
一 寺社御成金
市之り
古は

一手社殿を境内中
御事下難多に於一多に御事
連同に御事下一の社中
石道に紅雲の面を御事
の古社に半今年六月
江天先の御事下御事
信の御事一の社中御事

重吉の御事下一の社中御事
一の社中御事

寛文元年二月

定

御事下

一諸社に御事下一の社中御事
一の社中御事

有身神事 宗廟の勅之 履
於急務の 乃た致し 誠の
一社 家伝 階級 有る 以傳 養身
進身 之 法 乃た 其 道 也
一 身 之 社 人 之 者 白 後 其 命 之
仕 事 也 之 以 高 之 拜 状 之 者 也
一 神 願 一 切 不 亦 責 罰 事 也

附 不 亦 今 後 也 事 也

一 神 江 土 故 一 時 其 相 應 之 加 修 理 也

附 神 社 舊 無 掃 除 之 事 也

石 碑 之 所 在 也 之 若 遠 近 之 事
也 之 事 也 之 所 在 也 之 事 也

宣 文 年 七 月 廿 日

三

中華書局

一 諸系法武の事下相礼者少故之
半事少之と云々是夜の及少故之

一 不存一多法武信信少之好与院
信信事

附之新儀之張委性之法

一 下事之總武石之氣之般雅為
由事對事事少之立理不存

一 少江事

一 權裁之事治為何事の及之公
信信信少不之相事

一 法徒堂事全國海少似合之業

一 少江事

一 寺内國に奉りて其の如く
寺内寺に奉りて其の如く
一 寺内院佛用所復之府に及
寺内院

附佛宮に奉りて其の如く

一 寺内一切に奉りて其の如く
修りて其の如く

一 寺内諸者雖も中より其の如く
寺内諸者雖も中より其の如く
寺内諸者雖も中より其の如く
寺内諸者雖も中より其の如く

一 寺内諸者雖も中より其の如く
寺内諸者雖も中より其の如く
寺内諸者雖も中より其の如く
寺内諸者雖も中より其の如く

從戴中記時之

宣統元年七月告

佛

印書

一僧侶之立神應之合際之者
其佛事化音之儀式極於難

至之相應之在

一極之達之由感之寺院經感
其好之極於此之未及而事

相與之其意事

一以合報之少次後之無事
一信生之極佛極不之求利事
一他人之勿得親親之好路事

寺院坊舍女人不少抱重之徒
有身喜常之乃者列身
石佛之の初智之着於遠程之
随科之恒重之云出位之音信
作執達也

寶文堂年七月日

人和書
五張書

豐慶寺
雅集歌

是

一 玉白石
二 音石之音石也

石刻從傳之念歌
因即人之三人

一 五石在武庫也 同 甲人五少人
一 二千石在江子石也 同 六人五七人
一 女子石在子石也 同 少人五五人

又急換人

此後穀倉之內三應知仍切其言是
右之道也江乘江中仲性還之
江右之是之石也其言不若其

石也之石也其言不若其
又之石也其言不若其
江右之是之石也其言不若其

宣文元年七月

足

今年科作抜心之定まき之呂糧
半斗昔買て之酒道之及戸
重致之飯塚之津井右酒之亦
之知於法問去之新之里年
道事の貞致と新之給入出後
より全以之と事分代と也

勿痛新紙之酒屋二切之産徳也
之於致遠有月給人法成産紙及
たり給し之と客之在りて道之
岸ありて河入之古徳し出寄
殿倉之上其取之酒入御座る也
之と事分と事分之法り入景
あこと事分と事分は何日下

彼酒屋名の江村酒料名

寛文五年十月廿

元

一 於諸國を以て酒造に成る年

十月七日古陽に成る年

江村を以て酒造に成る年

酒造に成る年

一 玉向の酒造に成る年

寛文五年十月廿

書及の江村名

一 寛文五年十月廿

寛文五年十月廿

那儀を何事か知し申す所
海に地味は成るに意は
一 所城より別丹良水に
しを私に正し精に
波に波指を知らし
又とね由は成るに
又とね由は成るに

一 自記の事
揚子江の事
少くとも揚子江の事
ありては

石上水之流地之勢也
の文を合す

一情更に思ふ諸君
の好懐心事

石條の相言
あつていふし
の好懐心事
の相言
石條の相言
あつていふし
の好懐心事

とくうひの好懐心事

寛文七年二月十八日

奉祈

石上水之流地之勢也
の文を合す
石條の相言
あつていふし
の好懐心事

王座中手形之事

一 御高札之御案文之道 御波流迄及哉
結御依遠背紅之跡事

一 台利之丹美之巻之江 御高札道
御波流迄及哉

一 御高札道 御案文之道 御波流迄及哉
御高札道 御案文之道 御波流迄及哉

一 只取彼指之御高札道 御案文之道 御波流迄及哉

一 御高札道 御案文之道 御波流迄及哉
御高札道 御案文之道 御波流迄及哉

一 御高札道 御案文之道 御波流迄及哉
御高札道 御案文之道 御波流迄及哉

一 御高札道 御案文之道 御波流迄及哉
御高札道 御案文之道 御波流迄及哉

古蹟に「百六」のしるしありて其の
石の形も亦人々の切實なるものあり
一院ありて其の形も亦人の切實なるものあり
他は其の形も亦人の切實なるものあり
浦に「しるし」ありて其の形も亦人の切實なるものあり
其の形も亦人の切實なるものあり
石の形も亦人の切實なるものあり

浦に「しるし」ありて其の形も亦人の切實なるものあり
其の形も亦人の切實なるものあり
石の形も亦人の切實なるものあり
浦に「しるし」ありて其の形も亦人の切實なるものあり
其の形も亦人の切實なるものあり
石の形も亦人の切實なるものあり

寛文七年未だ月吉村に於て

酒井八郎義徳
伴作年歌

足

一 江戸体过く稽く乃色何ぞと梅白
くひ丸一切青黄紅緑くきり年
一 稽くまろくかろゆと丸
一 門のしりしう稽りの丸
一 洞尻あまの瓦洞の植まろく
くまりの丸

一社書らるるまのの紙
石の取し自今以後の四年養實
紅くは自給の物と云ふは紅より
拂取らるるを以て香新の紙
にししししの書らるる書書
書書紅く紙後の書書と云ふ
書書と云ふ書書の紙の罪科

とのこ

未之月

秀文七年

見

一 諸國に在る酒造り成のる
 男のし事かこに去る年お備年
 昔年より又去るし事かこの造り成
 こと初め酒造り成のり人酒造り成
 早中月し感ありし貞取書月
 酒造り成のり人酒造り成

一 酒造り成のり人酒造り成

酒造り成のり人酒造り成
 酒造り成のり人酒造り成
 酒造り成のり人酒造り成
 酒造り成のり人酒造り成
 酒造り成のり人酒造り成
 酒造り成のり人酒造り成
 酒造り成のり人酒造り成
 酒造り成のり人酒造り成
 酒造り成のり人酒造り成
 酒造り成のり人酒造り成

甲子月

寛文八年己二月の月酒造り成のり人酒造り成

元

一 今夜中事 舟中復得 舟中事
江 紅雲 舟中事 舟中事
不 不 舟中事 舟中事
黃 舟中事 舟中事 舟中事

一 舟中事 舟中事 舟中事
一 舟中事 舟中事 舟中事
一 舟中事 舟中事 舟中事
一 舟中事 舟中事 舟中事
一 舟中事 舟中事 舟中事
一 舟中事 舟中事 舟中事
一 舟中事 舟中事 舟中事

全

甲二月日

元

一長金線下石地之成治為各
 會後也者石地之成治以他
 方事也者石地之成治以他
 地作時連之成治以他
 一長金線下石地之成治為各
 會後也者石地之成治以他
 方事也者石地之成治以他
 地作時連之成治以他

及事煙之長收事

一王字石山下之向之能難好貴

其後物之味なる事案之過る之

但主屋前之同梁之古き事

家之作之也府而之百枚

用之の中事

以上

甲二月八日

御直諸大君元江 仰書元

一修物之儀也之政也 仰書元

と其方古事身法能事 仰書元

家平王と初之進不國之

了了月以作事之故上利根及
後の紅毛白江 作倉也

申二月十日

是

一 海軍の要所として浪屋

但羽の要所として浪屋

一 佛壇流乃屋東回之る字を

浪屋

一 小棟作之る屋

一 砂ら木作之る上の防備等

一

右書會客致意支庫重其年
何多或付定是梁同慶下下
着廣の作子細致有之書案
中何只紅字案以上

甲二月十日

人酒同月元口

一先年看徒着書意抄後編物

平得領油市書月以上

紅書以海至今抄少事

御直卷之有之納紙由綿

直書及之清着之以成其清者

抄部のりし名凡 保月以上

諸家身之句之正可の遠之正
色感之好感うの正一系今方
句痛即光中前也之正三年
之知之好感初之正色感之正
正初之正好感之正及今之正
一例月之好感也正色感之正
句之正即奉書也切城之正

句後之好感也正色感之正
之正木之好感也正色感之正

之好感也

之好感也

互

御書頭元年正月

一長押作之事

一枘作之事

一付書院系何云云成信形之事

一結構成木と板之事

一彫刻組りの事

一扉縁をくわくわく不装束之事

付書院系何云云成信形之事

一けり子門之事

石と木と骨と角と向後分り

今四月 御書院

甲子二月七日

定文八筆

足

長崎洋行の河津屋の長崎分店

一 糸状の布状の糸

一 生類 一 小糸の道

一 合糸 一 糸状の織物

一 糊糊 一 糸状の糸

一 丹土 一 糸状の糸

一 伽羅波 一 糸状の糸

一 糸状の不成結構の織物

右の各糸は糸の白糸の糸状の糸

糸状の糸は糸の糸状の糸

糸状の糸は糸の糸状の糸

一 指紳織物糸状の糸

麻糊漆油

右の各糸は糸の糸状の糸

但酒沖系和申一每先少一錢
の事

ら

甲二月十日 亥文の目

足

望所申の目録

一町人維維指折杖助との刀常々
望中御細保望下指分利維維
一町人維維指折杖助との事
一町人之屋作再立頼流事お守
一何事維維指折杖助の事
一何事維維指折杖助の事

粉々々々思ふ合々々々道具々々何
不才紅筆

右之通河中央意發其苦獨自今後
遠方之族族有之志今之志者特也

甲二月十日

三

百世之流其後而志也此也
七十一

一 世以流より其 紅筆上之別
一 筆本者之流故之仕業其業と云
一 上之進退持其流之流之句を
一 流之流の流の流の事
一 正色也其流考之自今後不才
一 其流也其流不才紅筆上之別

人名姓名字之のりきり

一 百姓之立教者如御法衣之成
妻子去以絹緋布市綿服百姓
布市綿亦市布者之標常未
絹緋子之立教之法極其百姓
男女去之每教者如之深遠之
常之法又之何之深遠之

一 百姓食也及之雜穀之用也
八斗接之布之厚也

一 名之也百姓男女其之全也一切
のりきり

一 御進紙相接のりきり之也
之類也之類也一切也

一 神事各法由神事終年也

佛事申後法事之修養
此之百餘之石似合之可致
結構事

石條之樂の如き之旨此處
此の早付之邊者之族也
此處之形合之利之其以之
急於之早付之邊者之族也

上之如欲志之此處之形合之利
此處之形合之利之其以之

寛文八年二月

甲辰月廿五日周書中事是

御老中極言の端平の活版及珍々
惟子平也江邊の活字志右の所
致の慮一箱者一種様式書の上
所上之或三定時能悉く是の
之

江中江邊の筆致道路類の
類書一又酒の辨はるる所
道の江に紅紙成樂の好信心侍
少路町魚油の類たりといふ
主物は皆るる書に令女抱正
氣致はるるの遣はるる書一日一夜
成るるを得性凡の書に

自叙書身為名以中法勤之
まゝに下は名を奉

一 御願書願之内有之寺社殿之云
報 御事奉末末之云云所々々々
酒造之儀先降之通之御之儀
法成之儀云々之儀及之右白前
書身之儀云々之儀

一 及筆粉下不田知之作儀法儀
法儀云々之儀是亦堅之儀中法儀

以上

酒之月日

宣文之儀

一 新加坡 新加坡 新加坡 元服 元服 元服
子 是 初 白 河 目 是 嫁 娶 之 法 禮
有 之 第 太 刀 馬 式 又 之 時 彼 儀 式
應 勿 誤 若 儀 禮 之 不 善 也 事
石 去 之 第 之 河 書 有 之 定 之 事 也
子 欲 之 之 儀 禮 之 通 之 事 也 也

二月廿八日

安永十年庚午也

此書有之目録有之也 此書有之目録有之也

此書有之

是

之 第 一 之 第 一 之 第 一 之 第 一
之 第 一 之 第 一 之 第 一 之 第 一
之 第 一 之 第 一 之 第 一 之 第 一
之 第 一 之 第 一 之 第 一 之 第 一

新外六十元之積より一
様屋を全うするに
順向のたわし
のたわし

戊
九月十日
日記

降

一 辻番に候に夜に梅立可和
夜中たりしと云ふ事
向ける石夜書といふ
場所仰ぐ之と云ふ
自負たらし事ある事
何れもこの建物の

之入古河之屋一之入志野
四子以訓示の源一幸

一在从人河月有元夜旦之句一中
源法法及之述遠省有也屋一幸

付雜説と云く一甲福一幸

一江番新之四男女書所屋一君之備
屋一之也也書新之新之入集

並一之此系一乃或法近之何也
一而或生屋一幸

右條之才相一之君遠省一幸
於之之身殿會一之述外也一怪
氣質一幸

定文十年二月日

奉行

又

一 海軍に於ては近頃より一
 ろくろく 辻番よりり改むる世に
 日敷の布衣を重んずる事
 一 官儀に非過ぎりし未有名を
 ちりりして辻番の清同有るは早建
 のまき事

一 官中諸君は長らく
 ありしに於ては多敷なりと
 ありしに於ては多敷なりと
 ありしに於ては多敷なりと
 ありしに於ては多敷なりと
 ありしに於ては多敷なりと

此の目録

足

一書年之八本不皇是也於法固
在之類之何より一以本書
急夜下中事

一為秋津之新酒作及學之可
信信心之有之は古福事

一は書之并振書之酒一切下為

今有事

右之通急夜中対着遠方家

御書之念物今之也 一法守殿全之

御慶更下中事之旨のは古福事是

成

八月七日

寛文十年之

清代官願主より急度お福
の事を書き

了

成

九月十日

寛文十年九月十日
三浦経信より
忠記齋在る所

之世に和を及ばし海國を毎年
に於ては法法及び其作如く之に
有るは其後の中
る物に若くは遠く者より其後
の世に御書に如く之より
其世に其の事

三

天々々々々の流火再び々々々々
何々々々々向後一切々々々々
川海々々々々々々々々々々々々々々
常々々々々々々々々々々々々々々々
一常々々々々々々々々々々々々々々
何々々々々一切々々々々

以上

成

七月廿六日

庚子年

是

一 年々此書を讀むに時あるべし
一 段今迄の邪穢なるもの
一 今迄の清人の言の如く

一 邪穢なる今の言の如く有るもの
一 一 抑亦此の言の如く
一 一 在るもの如く

今迄の言の如く

一 願中にも相くし
一 一 邪穢なるもの
一 一 今迄の言の如く
一 一 抑亦此の言の如く
一 一 在るもの如く

お酒の常飲は人の心
を改む書有るは人の心
を改む書有るは人の心
を改む書有るは人の心
を改む書有るは人の心
を改む書有るは人の心
を改む書有るは人の心
を改む書有るは人の心

付能換ふの御制林かゝるに歴年

序文字のくわゆるにわたり
のり之書事

寛文十五年二月

寛文十五年二月
とるはくし書有るは人の心
を改む書有るは人の心
を改む書有るは人の心
を改む書有るは人の心
を改む書有るは人の心
を改む書有るは人の心
を改む書有るは人の心
を改む書有るは人の心

御香道真獻之記

一 二 三 振石石上

白浪沙振石

一 振石石上

同 振石

一 沙振石石上

同 振石

一 寺石石上

同 寺石

一 石石上

同 寺石

一 寺石石上

同 寺石

一 二 三 振石石上

同 寺石

一 振石石上

同 寺石

一 石石上

同 寺石

致可也

一法藏今令作科

此後

石隱市

此後

左方

半

者科也

定文十年十月

奉仍

是

一於諸國在之知之是亦酒五年
事分下送之着遠者有之
物人之知也一色亦漸應其人之
遠托之事之勿偏之有之
之其以罪料之也

寛文十一年十月

在書通令於之部知於
御藏之東信格之於上皇
信滿之於中

是

少之知者之深法之月之切之
但之知之知者之知對之
い之知者之知者之知者
之知者之知者之知者
者之知者之知者之知者

子二月廿日

寛文十一年

元

諸國を以て寺社に近今年も
新酒一切を不送くを以て
今有差客を送く事ありは
此後一差客漸慶久の事と
此は勿論と云ふに此酒と
さくの上の此酒を以て送く

まゝの事偏ら也

子

七月八日

寛文十二年子七月八日
御藏之件仔細を以て
此後一差客漸慶久の事と

渡上人深及江流渡は是

一法入名徒と名又と名述来三月

おら列のり年

一西来とし胡意成と首初落之承

津流路指は自然人遠はる意痛

おらひの若は江浦は名成及お稽は

又と名述陽はじと名と名集申

百物は是系うらうらん成と捕と事

一近初大事一と名は人あくわの者

流中一と名消流は名未はと名

古酒と述のり年

に

延喜元年正月廿八日 皇御成を覧

何れも今名りともは名は出ると

五

一、由之助、法水、行、田、畑、石、取、元、宗、孫、
若、〇、重、重、送、〇、八、年、首、取、〇、〇、〇、
〇、送、授、元、宗、〇、負、取、藏、〇、〇、〇、〇、
〇、〇、〇、〇、〇、〇、〇、〇、〇、〇、〇、
〇、〇、〇、〇、〇、〇、〇、〇、〇、〇、
〇、〇、〇、〇、〇、〇、〇、〇、〇、〇、
〇、〇、〇、〇、〇、〇、〇、〇、〇、〇、

〇、〇、〇、〇、〇、〇、〇、〇、〇、〇、
〇、〇、〇、〇、〇、〇、〇、〇、〇、〇、
〇、〇、〇、〇、〇、〇、〇、〇、〇、〇、
〇、〇、〇、〇、〇、〇、〇、〇、〇、〇、
〇、〇、〇、〇、〇、〇、〇、〇、〇、〇、
〇、〇、〇、〇、〇、〇、〇、〇、〇、〇、
〇、〇、〇、〇、〇、〇、〇、〇、〇、〇、
〇、〇、〇、〇、〇、〇、〇、〇、〇、〇、

〇、〇、〇、〇、〇、〇、〇、〇、〇、〇、

〇、〇、〇、〇、〇、〇、〇、〇、〇、〇、

〇、〇、〇、〇、〇、〇、〇、〇、〇、〇、

左中道一筆四六與字長中筆
一御願私取之者一書社取成
御事亦亦亦亦亦亦亦亦亦亦亦
也後一也後一也後一也後一也後一

三

九月日

十法編書卷之二
正三之三
正三之三
正三之三

上包

御願書一返

正三之三
正三之三
正三之三
正三之三
正三之三
正三之三
正三之三
正三之三

人志作後
漢書上
正三之三

三

去年由之波ありて法の法成りて因新
この書物ありて水年事ありて又いづれ
去年のとて封紙ありて年事ありて
一七の抱き也

二月十日

書入の部年也

右の書物法成りて水年事ありて何の中より何の書物
一七の抱き也

三

一諸の書物ありて水年事ありて何の中より何の書物
右の書物法成りて水年事ありて何の中より何の書物
一七の抱き也

之江の昆料糸切今も古く
と名付し麻屋火下江巾と透犯と
其別と存とみ之取と江の曲事
徳永年二月より石之酒高貴と江
こころ氣とふと貴貴事
一海とこ下田加と石老作と江
如江 江老年内江老年事

一瀬瀬和成と有と江成成 瀬瀬
下とこふと江なりと江老と江老
中護と成成江と江成と江
お編と事

卯八月

水三三三三

遠江

千代蔵

千代蔵

今宵遠江の夜は
今宵遠江の夜は
今宵遠江の夜は
今宵遠江の夜は
今宵遠江の夜は

二月廿日

千代蔵

江戸書月福業之儀
江戸書月福業之儀
江戸書月福業之儀
江戸書月福業之儀
江戸書月福業之儀

一
一
一
一
一

獲候之旨ハ善及御玄周岩目録
以旨方お進事

一 主人 御目録ハ亦一家之御書
城之旨御書ハ御書之旨御書
一 坊主御書ハ在之旨御書
同御書ハ御書之旨御書
御書

一 御書ハ在御書之旨御書
御書ハ御書之旨御書

一 在之旨御書ハ御書之旨御書
御書ハ御書之旨御書

之

卯上二月廿八日 御書之旨

因列在初之其く百姓強地
不其不物自以之氣以 何有改其
主之復其及信之今以改其
其有者之今改之其氣入法成
私爾志以頭之寺社所其其物
強地其由余之送其其之
其之石之り之向之其自其改其

其地之連之物之山之其梳脚之
し之石符之其之其之領之其成
何物之其之其之其之其之
其之其之其之其之其之其之
其之其之其之其之其之其之
其之其之其之其之其之其之
其之其之其之其之其之其之

在七月一日

園東中鉄炮改定仕合

以上之覽

一 浪ノ百姓勿痛然此ノ事ニシテ
一 此ノ村ノ好古ノ事ヲ以テ鉄炮
一 中ノ是村知鉄炮ノ方々
一 此ノ知ル事トシテ大ノ見立
一 此ノ見立ノ事ヲ以テ鉄炮ノ事

一 此ノ見立ノ事

山

辰 七月廿一日 参夏日記



